

幼児の運動能力と両親の養育態度の関係

○常木誠司（埼玉大学大学院） 藤巻公裕（埼玉大学）

<目 的>

子どもの心理面に重要な影響を及ぼすと考えられる要因に、親の養育態度があげられる。両親の養育態度が子どもの心理面に影響し、そのことが子どもの遊びの環境や運動能力の発達にも影響すると予想される。

それらの過程の因果関係を明らかにすることは困難であるが、影響の有無を明らかにすることは、幼児教育に有用な知見をもたらすであろう。

このような研究として、松田ら(1971)は母親の養育態度と幼児の運動能力の発達との関連で検討を行い、藤江(1984)も5歳児幼児に運動能力テストと両親態度診断検査(PAT)を実施し、運動能力の高低による養育態度の各尺度ごとの比較を行った。

本研究では PAT 尺度の相関分析と、尺度を構成する各個項目ごとの検討を行い、幼児の運動能力と両親の養育態度との関係を明らかにすることを目的とする。

<方 法>

(1)対 象 一住宅地にある幼稚園の年少組5歳児とその両親、男児152名・女児170名、および、その男児の父親・母親（それぞれ152名）と女児の父親・母親（それぞれ170名）である。

(2)測定年月—昭和63年10月および平成元年10月

(3)測定項目—

1)運動能力の得点化 … 東京教育大学体育心理研究室作成の幼児運動能力テスト5項目(25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ、体支持持続時間、両足連続とびこし)を実施し、それらの標準得点の合計を運動能力得点とした。

2)両親の養育態度の調査 … 田研・両親態度診断検査(PAT)を、父親・母親それぞれに実施した。この検査は、両親の日常生活における子どもへの接し方について、拒否(①消極拒否・②積極拒否)、保護(③干渉・④不安)、支配(⑤厳格・⑥期待)、服従(⑦溺愛・⑧盲従)と⑨矛盾、⑩不一致の10尺度によって診断するものである。それら各尺度は10個の項目から構成されており、各項目は「ほとんどあてはまる」～「ほとんどあてはまらない」の順に1～4点で点数化される。これら項目の合計が尺度得点であり、高得点であるほど養育態度に問題傾向が少ないと解釈される。

<結果と考察>

(1)幼児の運動能力得点と両親の養育態度の相関分析

父親、母親の養育態度の関係性を考慮するため、幼児の運動能力得点を目的変数におき、父親、母親それぞれの尺度値を別個に予測変数として、各尺度ごとに重相関係数を算出し、有意差が認められた尺度については、偏相関係数も算出した。

その結果、男児においては運動能力と両親の養育態度に明らかな関係性は認められなかった。女児においては、表1に示すように母親の養育態度の尺度③⑤⑦⑨の各尺度と、父親の養育態度の尺度⑥には、いずれも女児の運動能力と正の有意な相関関係が認められた。

表1 女児の運動能力得点と父親、母親の養育態度
尺度の重相関係数・偏相関係数

尺度	重相関係数	危険率 (p=)	親	偏相関係数	危険率 (p=)
⑥期待	0.1884	0.0490	父	0.1372	0.0432
③干渉	0.2138	0.0202	母	0.2138	0.0005
⑤厳格	0.2360	0.0084		0.2137	0.0005
⑦溺愛	0.2493	0.0048		0.2371	0.0001
⑨矛盾	0.1959	0.0381		0.1838	0.0035

しかし、ここで得られた相関係数の値は高いものではなかった。さらには、両親の養育態度と幼児の運動能力についての関係性の説明としては内容的具体性に欠ける。したがって、再度検討を行った。

(2)両親の養育態度を構成する各尺度、項目ごとの検討

運動能力得点に基づき、男女児それぞれ運動能力の高い者30名(H群)と低い者30名(L群)を抽出し、その父親と母親に分け、さらに幼児を性別で分け、両親態度診断検査の全100項目と各尺度の得点について比較した結果、母親の養育態度について有意差が認められた項目、尺度を表2に示す。以下に、母親の養育態度について考察する。

母親の男児に対する養育態度について、H群とL群で有意差が認められたB7、I7の項目に着目すると、どちらも溺愛尺度を構成する項目である。溺愛尺度にあって有意差が認められなかった8項目の内容と比較検討すると、H群の男児の母親が有意に低い傾向にあったB7、I7の項目内容は特に、身体的活動を伴う親子の相互交渉場面を述べている。その他のD1、D4、B5の項目はいずれもH群の男児の母親の得点は有

意に高い傾向にあり、それら項目が示す内容には否定的である。厳格尺度を構成する項目G3では、H群の男児の母親は有意に肯定的な養育態度を示している。これらの傾向は溺愛傾向全般を支持していないと考えられよう。したがって、運動能力の高い男児の母親は、身体的活動を伴う親子の相互交渉場面においてのみ、溺愛傾向が比較的強いと考えられる。

母親の女兒に対する養育態度について検討を加えると、H群とL群で有意差が認められた干渉尺度を構成するC5、F5の項目のキーワードは「遊びへの干渉」「失敗させない配慮」であり、これらの養育態度はいずれも子どもの活動能力の発展に関連が深いと考えられ、H群の女兒の母親の得点が有意に高い傾向にある。干渉尺度にあって、有意差が認められなかった8項目のキーワードは「身の世話」「食事の世話」「創作活動への干渉」「着衣の世話」「けんかへの介入」「排泄の世話」「行動の催促」「年令以下の扱い」であり、これら項目の中には基本的生活習慣の確立に不可欠な教育的干渉とも言うべき項目が多く含まれている。それらの養育態度にH群とL群の間には有意な差は認められていない。さらに、B3、F3、D6、G7の項目内容に着目するといずれも、子どもの自発的活動を抑制する親の養育態度を示している。これらの項目においても、H群の女兒の母親の得点が有意に高い。加えて、G4は「早教育」に言及するもので、それは親の高い期待のあらわれであり、子どもを圧迫するものである。こ

の項目でも、H群の女兒の母親の得点が有意に高い。

以上のことから考察すると、運動能力の高い女兒をもつ母親は運動能力の低い女兒をもつ母親に比べ、特に子どもの「遊び」といった活動に干渉する傾向が少なく、子どもの活動の自発性や持続性の発展を促す傾向にあると考えられる。

各尺度ごとの検討結果から、運動能力の高い女兒をもつ母親は尺度③⑤⑥⑦において、有意に得点が高いことが認められた。この結果は、先に行った相関分析の結果を支持するものである。

藤江(1984)の報告によると、運動能力の高い男児の母親は、運動能力の低い男児をもつ母親よりも⑤⑥⑦⑧の尺度得点が有意に高く、運動能力の高い女兒の母親では⑨の尺度得点のみに有意な関係が認められた。藤江の研究結果における運動能力の高い男児の母親の養育態度傾向が、本研究での運動能力の高い女兒の母親の傾向であるように、幼児の性別について男女を入れ替えたような結果が得られている。今後の検討課題であろう。

[本研究をすすめるにあたり、さかえ幼稚園の秋谷節子、長島光子の両氏ならびに教諭の方々に多大なご協力をいただきました。記して感謝いたします。]

表2 運動能力の上位群(H群)・下位群(L群)における母親の養育態度の検討結果

		上位群(H群)と下位群(L群)で有意、または有意傾向の尺度、項目内容
男児	なし	D1 消極拒否[この子とは何となく、しょうが合わないと思うことがありますか。]*↑
		G3 厳格[おとなからみてくだらないと思われるものは、ほしがっても与えないことにしていますか。]*↓
		D4 期待[こどもの能力に不満を感じるがありますか。]*↑
		B5 干渉[こどもが食事をする時は、目がはなせないほうですか。]*↑
		B7 溺愛[こどもを抱いたり、おんぶしたり、ほおずりしたりなどすることが多いですか。]△↓
		I7 溺愛[こどもの遊びに、親も仲間入りするほうですか。]*↓
女兒	③ 厳格 *↑	B3 厳格[親がよいと思うことは、こどもがいやがってもさせていますか。]*↑
		F3 厳格[こどものいい分を無視するようなことがありますか。]**↑
		H3 厳格[親の思いどおりにさせようとしていますか。]△↑
	⑤ 干渉 △↑	G4 期待[こどもの能力をのばすために、絵本・玩具などなるべく程度の高いものを与えていますか。]*↑
		C5 干渉[こどもの遊びに干渉するほうですか。]*↑
		F5 干渉[こどもが失敗しないようにと、先まわりして気をつけてやりますか。]*↑
	⑥ 不安 △↑	D6 不安[こどもをひとりで外に出せないほうですか。]**↑
		H6 不安[事故の恐ろしさをおどかして、話して聞かせますか。]△↑
	⑦ 溺愛 *↑	A7 溺愛[こどもを友だちと遊ばせるよりも、おとなが相手をしてやるほうが多いですか。]△↑
		D7 溺愛[友だちにいじめられたり、先生にしかられたりすると、こどもをかばってやりますか。]△↑
		G7 溺愛[こどもが家にいるときは、なるべくこどものそばにいますか。]△↑
		H7 溺愛[こどもが外から帰ってきた時、大げさによるこびを表してやりますか。]△↑

** p<0.01 * p<0.05 △ p<0.10

(注) 「↑↓」の記号は、H群の平均得点がL群の平均得点よりも高いか低いを示す。